１　た・づ・な

「馬の博物学考」

財団法人　馬事文化財団

理事長　田村　正明

皆様、明けましておめでとうございます。

旧横浜競馬場の跡地に、馬事文化財団・「馬の博物館」が設立されまして、本年で３２年目を迎えることとなりました。誌上をお借り致しまして、平素より皆様のご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

ところで、昨年(２００８年)７月に、当博物館において、秋篠宮殿下が主催されるISAD（Interdisciplinary Studies of Animal Domestication）の“馬”に関するシンポジウムが開催されました。これは一言で言えば、「動物が家畜化される過程」を研究するもので、動物学・農学・民俗学・文化人類学等々、広範な学問分野にわたる融合が求められ、まさに博物学的に大変興味深いものでした。

そんな出来事を契機に、今後は、人と馬とのかかわりに関する社会科学的側面、および、馬そのものに関する自然科学的側面にも力を入れて、運営活動の新局面開拓と充実を図る必要があるのではないかと考えております。

ご承知のように当博物館は、横浜市中区という住宅街にあり、身近に馬が繋養されていることから、近隣の養護学校の生徒さん達も多数来苑されます。障害の状況によって、「馬へのタッチ」から「体験乗馬」まで実施しておりますが、その際の生徒さん達の反応を観察していますと、大多数の方に、パッと輝く表情が現われます。車椅子に乗ったままで感情表現の乏しい生徒も、馬に触った瞬間、口元がほころびます。同時に「あったか～い」「やわらか～い」といった言葉がもれます。乗馬の方では、ヘルメット・プロテクター・長靴をイヤイヤながら装備していた生徒が、先生の介助で乗せられ、当方のスタッフに曳かれて馬場を一周するころには笑顔がみえ、交代するのが口惜しそうなくらいにみえます。中には、全く拒否する生徒もいますが、そのような子は、ポニーに触れさせることに切り換えたりします。障害が身体的か心的か、程度はどのくらいかによって、「ニンジンを与える」「撫でる」「乗る」といった動作

を臨機に行わせるようにしています。

本格的な「ヒポセラピー・ホースセラピー」を行うには、運動療法士などのスタッフが必要で、とてもできませんが、「動物に直接触れること」さらには、「自分を乗せて移動させてくれるという一体感を得られること」などが与える効用については実感できました。現代社会における馬の活用という観点からも、これから注目しつつ、より多くの機会提供を心掛けると同時に、外部の研究者の方のフィールドとして利用して頂くことも考えています。

一方、昨年、モウコノウマの骨格標本を入手でき、我が国の在来種である“御崎馬”（都井岬）や済州馬（韓国、済州島）、更には、鎌倉時代の馬（由比ヶ浜出土）などの収蔵されている骨格と比較してみますと、個体差を勘案する必要はありますが、素人目にも大変よく似ておりました。我が国への馬の伝播ルートを容易に連想させそうですが、今後、専門家によるＤＮＡ・Ｙ染色体鑑定などの自然科学的アプローチにより、一層興味深いことが判明するかもしれません。

人間における「イヴの七人の娘たち」のような広範な研究調査が馬についても行われて、最も原始的野生馬とみなされているモウコノウマから始まり、ヨーロッパ山岳ポニーや森林馬、中央アジアの各種の草原馬、アラビア馬、中国の河曲馬、在来和種など、ユーラシア・アフリカ大陸にまたがる壮大な馬の遺伝子関係地図ができたら、素晴らしいことであります。遺伝子混交とその背景には、幾多の民族と文明の興亡の歴史の因果が潜んでいるであろうことは想像に難くありません。というような夢だけは膨らみますが、実際は他力本願で、どこかにそのような研究者が現われるのを待つばかりです。